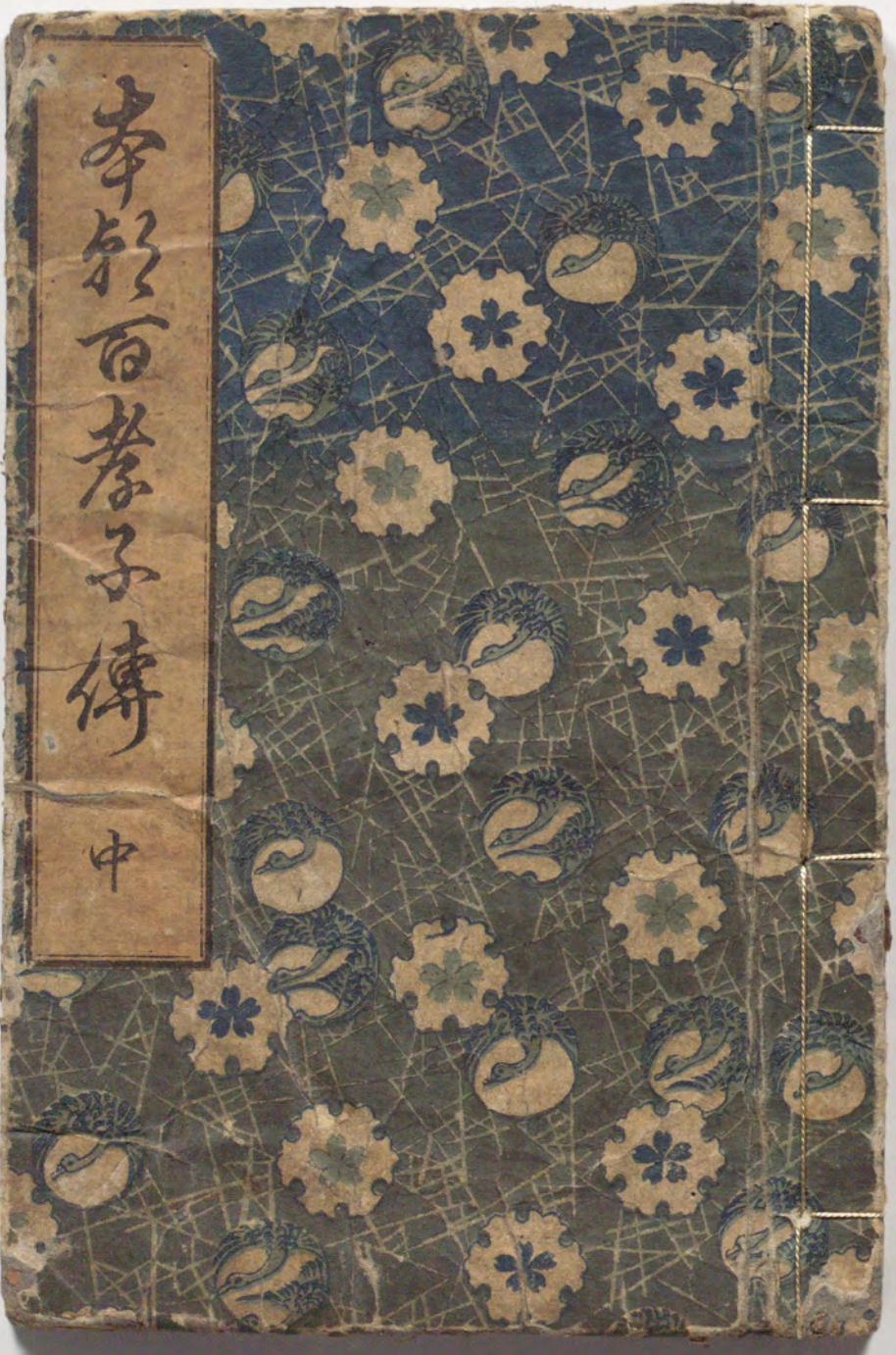
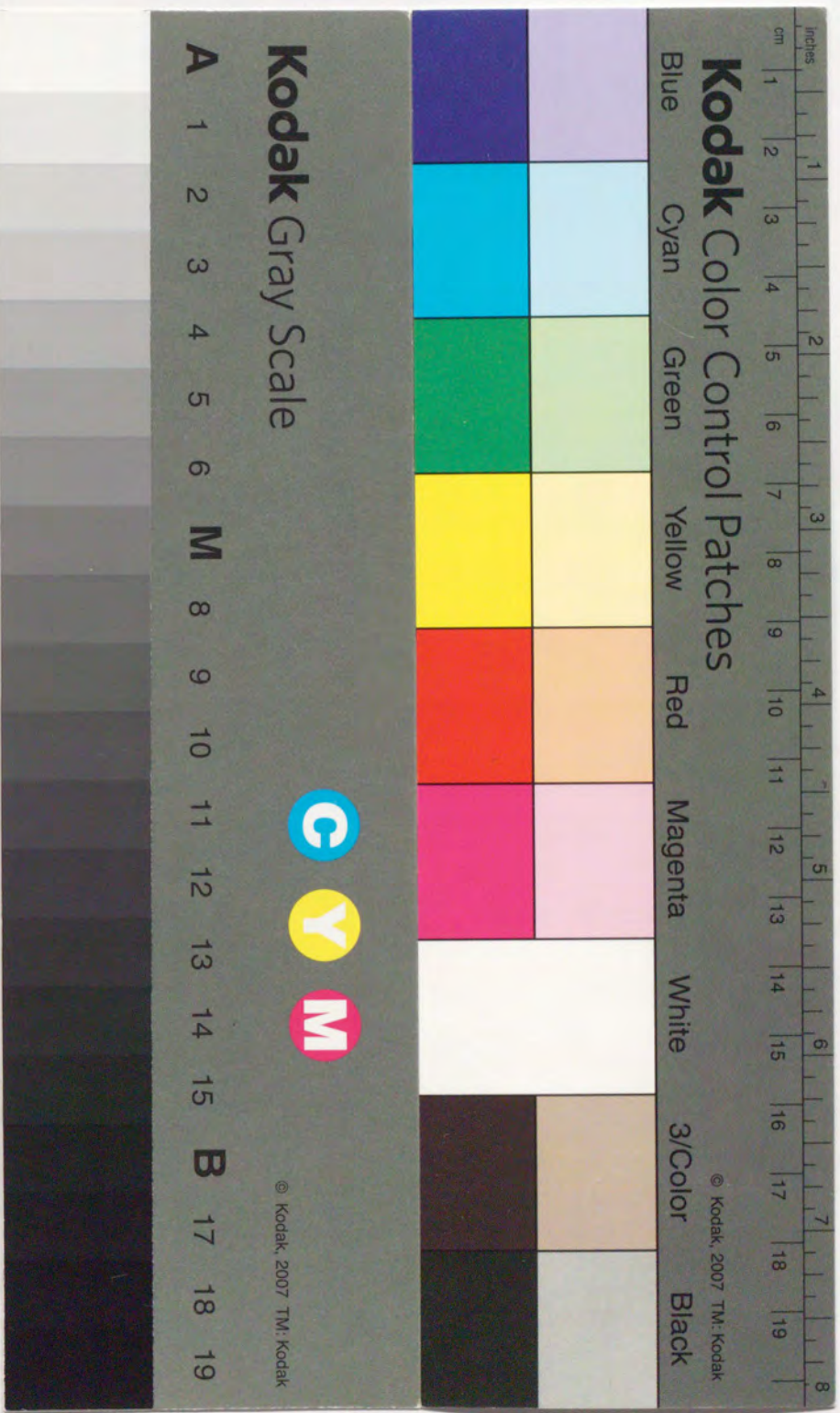
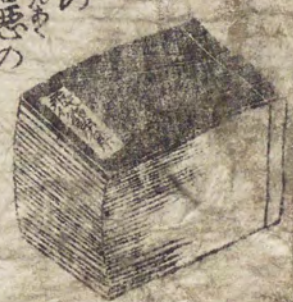




新改
大増補 早引

此所集の雅俗要用の文字と撰め
音訓の數をりて出はし且文字の出所を分注し
傍小真字と屬て親宜とて便をむむ且
改正版忘令多形沈文の素文章大體書法の
大際或ハ版付雅俗の法法曆の吉凶中歴下歴善惡の
分附日本六十條の圖表其の日用有益の工を何となく輯録して
その後小附くむらん事の要用は於て聊事を缺くを免海内多岐の事也



東都書肆

大傳馬田二丁目

丁子屋平共衛

右のどの書面と下され眼あり甚助の難有源を落し々
をさるる出ける節城中の諸士はあて其孝の感賞一授を
方の孝悌の援群の至るをもく維ゆる道の教と受て之と向け
且其甚助はあて養るやけ身元來孝悌とを存知ゆり
とも唯常ふ母と大事とあつて因て母が食薦ぬおれ小来も食
事とさるるをこのまに母が安穩ふ養るがまに五身も眠るる
むとのふと人とうちて現孝哉々と感入りのや亦同やを方
の孝心如斯るふ兄等が不れ狀未進の始末の始末の始末の始末
るの故と同胞父母の兄のどのあつてぬかるとさるるは
額小けとやさう然やふ思ひまの理るれどもまの金

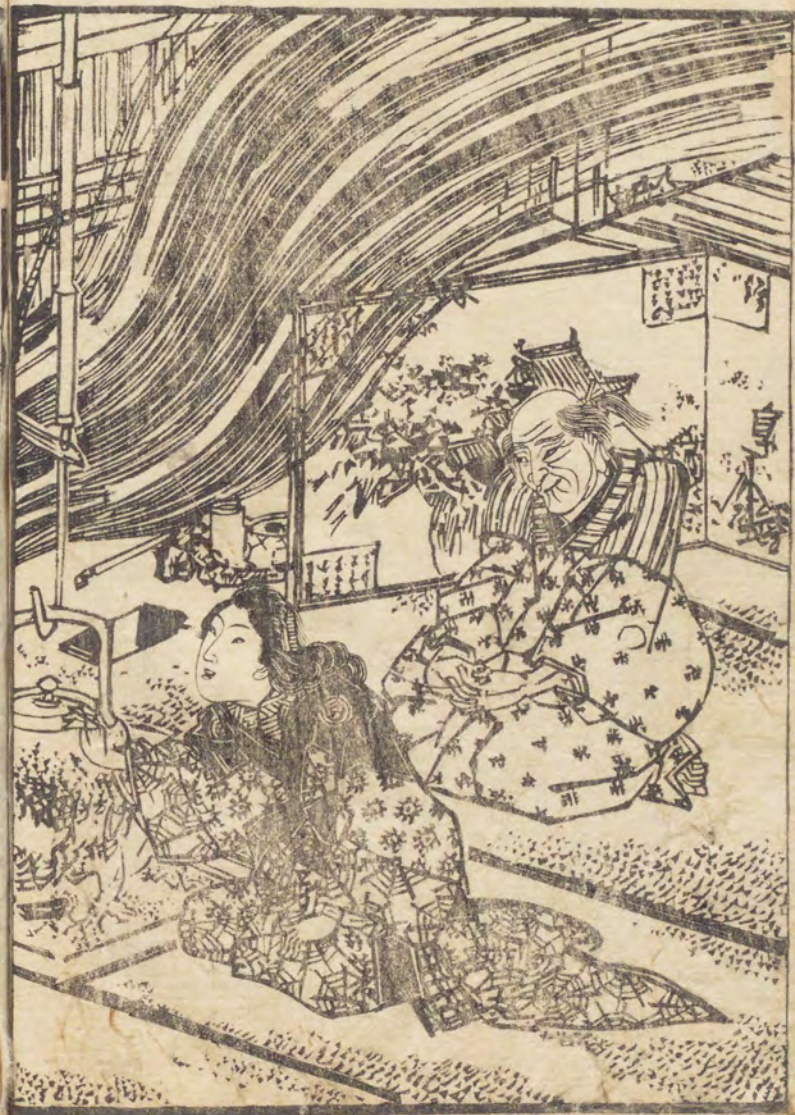


兄が命をうとせられ身と遠い那者どもは生得も病ふ
るやむをりて農農業のなまら果放しからば因て存外ふ穢りと
うけ他ふ嘲られいのも中へるく小民と異なりぬと
と相々合しとされ歴々の諸士達もこの甚助が志未不及
とて喝采あげ有様一やふ其母の後百歳の長寿を保ち
二個の兄も后々い弟甚助が温順るるふ恥て後悔し各身
の行をあらため農農業ふかと承て野山のかせきと励む
何とも覚ええりせしとて

嗚呼至善なるま助が孝心是國中の師表とるて又
幾個の教を知らざる孝子善人を出せりるべし

○小山鳥の孝女

昔九州の中やて什麼何と云ひる嶋の孝女は神威と驚く不孝の
男の神罰を蒙りて一奇事あり寛永の初年の比とて漂流
きて此嶋ふ船と吹寄られ旅傍の眼前ふりてふ但しその
孝女と不孝者の呼称と傳ゆされ所幸あるふ似され孝
子と獎し不孝子と怖れむるの一助され不問とてふ記を却
も彼嶋ふ一個の老人あり元い貴いから活計が今ふと家
業ふ台より行跡とてうふふふふ畢ふ食くる果ぬ父既
年老て親も至極ふ及ぶも娘の何事と云者孝行を其の
不孝と常にいふる罵ふはて親切なる言知るべき





はるあふ近隣を日毎に嫁の老を憐れ開きまの不孝を憎
まぬ人とのるけり嫁の里に今もさ不自由な家なれば聲の
見ると忌嫌ひて娘とて戻さんとされども娘の舅の上を按て便
多しといて難縁せむ尚情を夫の機嫌をとりて親里帰ねひ
程の里の方より漸々音信不通となりて不自由なれども嫁
此も苦不病む甲斐なきを舅とてさういふ抱かぬ成り價の
高きを厭ふ好味者と買ひての饌供て舅のまめまの常大食を
ま我分をも合せ居て出せまの足とてそけ者てへ飯をり食ふを
不承一早く往て酒買て来れども徳の徳法投出せま妻の金異後
陶を以て出酒とて帰来れまの毎日もその膳に付る有と喰
尽して居嫁の既ふその意を察し急いあ舅に向ひてや青と食
の味美うちやと進れども舅の嫁の老を哀れ毒ふひけれは
不承今日魚肉するとも我の此も苦く其方許の毎日も菜
と居するのいさ今日の一切を私料を食てれと怒るを嫌ひるを
て是の又いふものゆるめふと所をいけ程いつた食のけさめあふ
斯る魚菜とまわらせ少いれは合ふふとのやとて細へと解
退の心似て是非とも合てめれといふも父の老ふつげ嫁の老
よと相共小儀る解を備ふは居まらうと笑ひま程ふをさめる
らば老人の不食るが却て身の養生なりさういふ人のあるを我
們が食て得ぬ人といふも早く父の膳に添ふる者をわけて一

女郎が孝行づく所の奴めと附合しつたを父のめ
け狂児めが何なるも親子共侶も合せて洋ともあつたは嫌と
打ち擲する罰あり不孝心は親も忘れ非道の行ひを
トと老る身も腹中を却合の力に彼男を庭の方へ突
飛せし様より下へ擲ひあててその石も腰膝よりちりも天の空
ふされも彼人間の道を知り極悪人浮世遠く嶋育
まゝ其頃の旋えさるる世界の曲者なれば親の不興をのこも
せむ身身の痛ふゆゑ怒りて庭ありあの大斧を押取あげて
親と妻とをち殺えと走かる勢ひ最大怖く鬼神のごとく
見えけしは嫌ひ吐きと罵るのまゝより外面のへ逃出まを脱し

いせと追近づくその冷言暴言は足もきく殊更男を
老る足のと退れさるる絶体絶命既小危き折しもあま
森の梢小一邑の黒雲起よやをえけさ早くも此方へ舞下り
来て彼悪人をまとい包と大空さへて巻上れば男と嫌ひ非道
の斧も各命を失ひ身身の痛ふを越えざる今も今の容体
の語り何の故とも辨へね親子の只驚き怖れて我家の内へ
逃て入る程もあつたを思ふ中より忽ち彼男の首をえし
と投落し雲のその居又元の森の梢小に落ちて東晴人と
るのけり其附合隣の人にも眼前ふ足を見て怪し居るが
るく互に戦慄して自を人合とさるるにけり日の夕方同

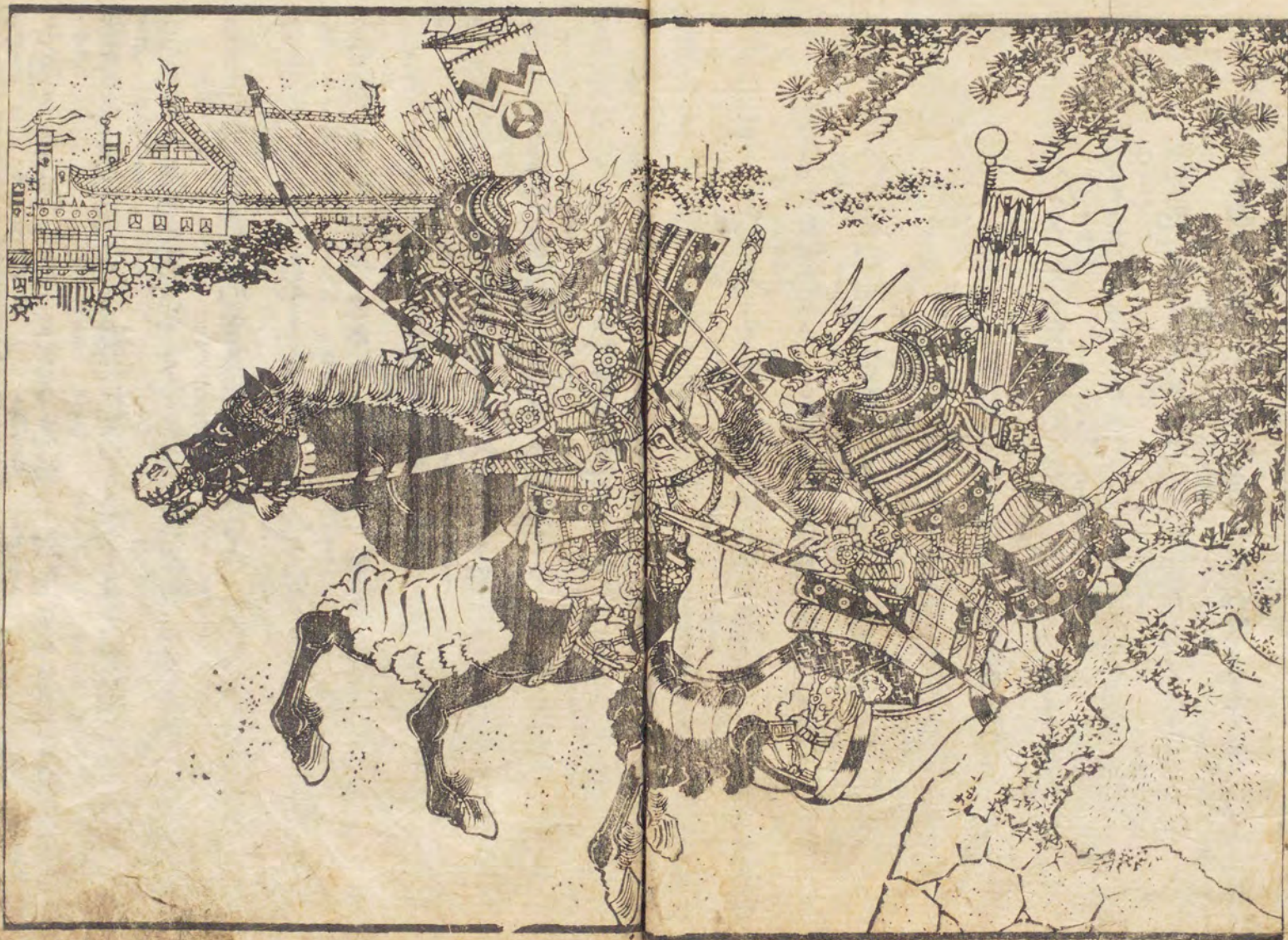
卿の人い嶋ふ奈る所の関帝廟ふ清々その神像を拜るが
情ふれがあらふ彼関羽の霊像のふ血のあらぬる生首を
提てまけまば大いふ敬ふに再々々々是則親不孝の件の
男の首級をふもましく懐にまゐるてもその人へ報けるふ
くも八方へくつてては事書中ふかれ多く不孝の罪の天
將を怕るるものゐるにふもよりて男を慎み終ふ孝道赴
く者多く出来るとはさるる期て右の孝女の家親里舅
と川取実の両親ゆも仕日夜孝行怠る親々の亡後を
尼とて行ひま進人あ追若回向身勤とふれがなる小嶋
の荒夷も孝女尼と呼ばるふひ敬ひけるとなる

本間資忠

此人相模國住人本間九郎資忠貞のより皇元十六代光厳天皇の
正慶三年の春二月のよりや先帝の御旗より依て鎌倉の北条高
時之ひは終る諸國の軍勢を討め向ふける其勢凡八十騎
三つたつて軍配吉野赤坂金剛山の三つの城を責ぐる先吉野の
城へ三階堂出羽入道及温と大將とて往て他家の勢を交ふ二
七ふ海邊ゆへ押うり金剛山へ長崎悪部左衛門尉を大將とて二
萬騎の軍勢を進めり赤坂の城へ阿曾彈正少弼を大將とて諸
國の大小名千騎二千騎三つたつて五千八百餘人引連れ相つたつて幾
千勢とも見えみか山川ゆ裏さるる最怖るる軍にて天王寺の

方より進んずるまじき城内の軍兵はるく弱きけしきもく防戦の
用意嚴重に見えけしき大將阿蘇氏に瀕國の寄るに下知を傳へて
救軍一同の責ぐる差違をいそぎて必だ援救のべくるを定め及く
者わづかる罪科と觸れしけるが爰に武藏國の住人八人見四郎道
恩野といふものなり本間九郎資貞と向ひてまゝと語りける作
此度の戦ひは味方の軍勢雲霞のごとくまじき勝利を得ざるやう
なまじき情錄念ふの山溪を案じたる天道はるるに鉄盆の
理を適る道へあづかるを才一歩の臣とて君を鴻根の流に
苦しめしめる積惡の罪人の咎めはるるにまじきなまじき今及に
戦ひ勝ともいふ程もまじき北条一家の亡びるなり疑ひあり

其の省の身なりとてやせども國を小の武國とて一族を豊に
養ひたる最久の既の齡の七旬の餘り一翁とありぬまじき
今日より後の命なりとて思ひ出のいんや腰に鉄盆を
長生と武運の傾くを見るまじき老後の恨と膝の濡りと
まじきなまじき明日の合戦の一番の先鋒にて北に
名をまじき遺さんとありのまじき貴族の命なり思ひ
まじきなまじき後世に本間資貞の命の中を無きまじき
思ひのまじき夫とて義諾言葉をわづかる人國の
まじき思ひのまじき答へての思ひのまじき理なり
まじきなまじき戦の末の戦がたき志しき道理なりとて是程の之軍が



歩團とて其の中をさうする先駈討死をせしむるも誰か高名と
賞するものらんや無益の斬るに織らばと矢の種とるもの
某は只人並に戦ひやさんと云けり人見はまづ本意を破る
さも不興親陣斬を立上り宮太の本堂の方へさぐと行き
けり本間九郎のやゝとてその人を付てさぐせける腰の矢
を射ぬる石の花衣のやゝとて一筆のさぐに己が陣斬へ
歸りしやを聞ゆるをさぐ上りぬるさぐ左有とて此人の
定めて明日先駈高名のあはせん疑ひる我も弓矢の名と
落しと兼て覚悟の戦場のやゝとて他人の先せとてさぐの
めづるを我もさぐ一番の先けとて名を末代に傳へと

まづ宵の間より人かきを用意を調へぬる陣斬を立
出せ一騎東條さぐと向つて石川河原のやゝ一頃夜に
かのやと明とる朝霧の晴間より南の方を見ゆる唐
倭威の鎧とてそのやゝ白母衣を鹿毛の馬に乗る武者
さぐのやゝ形勢を赤坂の方をさぐみけ本間へ色を怪し
つて人見のやイ誰とてとんと近寄れぬ則ち人見
さぐが本間を見てうら矢ひ昨夜足下の宣ひしをさぐの
由断をさぐと違ふとせし孫もさぐ其のさぐのさぐの
さぐが甘くも欺るさぐのさぐと云つて馬をさぐあけれ本間も
同くも矢ひさぐの老功のなけり今も互に前後をわたり

中へんや一軒の戸を曝し眞途の路もひらき同通中へん
待て更と言ふ人見も嬉し氣ふらうそひて馬を並べ赤
坂城を直付け鳴呼此西人の忠烈武勇へ寄ひ八十余万の
中へ勝是志古今稀あるものも傾く武運の北
条家み及ぶ後の國堂を捕ひるきの戦場めを告れも薄
き最惜しけきそも西へ城を走付堀際馬を並べ燈臨
張弓技実多之青を名をあげて武勇國の住人へ見四郎
入通國行行軍つらて七十三才根便國の住人本回九郎資貞
け年と三十七才鎌倉をゆく軍の先陣をいんととらふ
並せて向う元來尸への戦場ふさても覚悟ふぞ我と魚に

人へ出入せりるの程を山見せりてあまふはとて城を睨で
ひらう城中の者どもへ見せ見て坂東武者の公け音も今も
うらむを彼等へ懸谷平山が一の谷の古のをきくて向ひ
る人跡を續く武者も一命おどろけられぬの跳り金
金をうらひ敵軍方め笑ひまはる只ものほふ槍を手にて
返すもせど人見へ怒りてあま高き城中の腫病のども
朱国が覺ゆる怖しう早且より走向ひとまやどまを各ま
ども一筋をも射ひまをひそまり居るへんのぞや個一
我を侮りていそ其多るる柄のやどを見とて馬より
飛り堀の上より細帯をさくくと走りうらう二人のものへ

出陣の暇み引傷て木戸を切落さんとあつりけは城兵
等々驚き強き土小間櫓の上より一七並前を揃へて雨の
降ごとく射をけは本陣も人見も鎧のまゝの義毛の
おと射つりつるまゝで兩人討死となり極ありあつ
るまゝ一足もあつるまゝで城をさす破らねど通るもの
同様に二人とも就とるてうち死せり此時かねて本陣が
ゆりある一人の智恵家朝の十合をさけんと跡より後ひき
ける二人の首をえりて天王寺の陣中へ立帰り本陣が
る息源内をみくらふその後のまゝとつりける由を源内
父の首を一目見て唯程ものごとく泣くを涙の果も

ありしがあつるまゝより鎧を肩に投りて馬に鞍を乗ら
けは毛髪とあつりしを聖いわや一門を這へるもの
ありしを父上との合戦の先近とす此のつるを天下の
人みな名をききんとあつり思ひやう山家おののまゝ
あつる若武者の名をよと一途に在るまゝ父子連立てそ
向ひしあつる左に有し七ひをわすれ途のみあつる
相模殿の命を献り恩賞をばみ孫の栄花に賜さんと思ひ
たつるあつるまゝ一命を捨ててあつるものあつるまゝ
深くも思ひとつるまゝ又其許に敵陣へかけ向ひ父を等々
討死のふ誰人か家を継つるその恩賞を可哀ぞと孫を



東
真重画



斯く積るく赤坂の城際近く有り馬よりしをあらくと
 弓股城の城戸をさき城中の人々みちをひいて是まて
 赤ういり出令とていふ城の兵櫓より小園を明て
 頼る人誰人あそびぞ同く本回へお見わけは今朝
 城へ向ひ討死に遂ひり本回九郎資貞が嫡子資忠と申
 者のそいふ人の親の事を思ふて身のみをせ唯
 一人兄のち死に母を今ややふ義の父のちとも死
 出三途へ伴つとを思ひ極めゆるま本意を遂させし人
 うい洞あふ懸懸の演けま本戸を固め兵等も敵
 矢とて義武者の孝心を多きもひきを聞てはさかば
 嘆

